

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は、日本語とタイ語の人称詞の使用に関する対照研究である。人称詞は、コミュニケーションにおいて対人関係に影響を及ぼすとされるが、タイ語と日本語では、人称詞が、話者と聞き手、第三者との関係という相対的な「個」を表す点、また、人称詞を意識的に省略する点で共通しているという。本研究の目的は、両言語の共通点である「人称詞の省略」に関し、その要因を、構造文法の立場から表現形式に、社会言語学および語用論の視点から対話者間の関係（上下関係・親疎関係・ウチとソト）に着目し、用例における使用状況の分析と話者の人称詞使用に関する意識調査をもとに明らかにしようという実証的研究であり、学位論文に求められる研究的な意義を十分に有すると考えられる。

また、タイ語と日本語に関し、対人関係に関する認識構造の違いと自称詞・他称詞使用との関係の一部を明らかにした点、特に、タイ語人称詞研究が自称詞を中心としてきたのに対し、対称詞の使用実態を明らかにした点で、本研究の独創性は高い。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか

本研究では、タイ語と日本語の人称詞使用に関し、翻訳資料の用例分析とアンケートによる意識調査を実施している。対訳資料から人称詞を掬い上げ、その使用頻度を数量的に処理し、さらにその表現形式上の制約や社会言語学・語用論的な要因に関し、観察・分析を通して、両言語の人称詞の使用・不使用の決定要因を探っている。言語の対照研究において、分析対象の表現とその言語環境との関係を精査する上で対訳資料を利用することは正統な方法論の一つとなっており、本研究の目的に照らしても妥当な方法である。また、自称詞・対称詞の使用について、両言語の母語話者の内省によるアンケート形式の調査を行っているが、使用場面の設定および質問項目も十分に検討された適切なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

(2) に示した方法により、20冊の対訳小説の、多様な会話場面における約2万に及ぶ発話から、1万6000程の人称詞（自称詞・対称詞）を掬い出して分析対象としている。また、母語話者の内省による人称詞使用・不使用の状況とその意識に関するアンケートは、年齢及び性別を考慮した上で500名以上から収集しており、両資料とも膨大であり、研究目的に合った標本資料となっている。分析は、表現形式別の人称詞の使用頻度により両言語の比較を行い、表現形式の制約では説明しきれない差異について、年齢・性別・上下関係・親疎関係等の属性・人間関係による検討を行っている。その分析には統計的処理（ χ^2 検定）が行われ、タイ語表記版のみに見られる人称詞使用4000か所の質的な観察が加えられるなど、量的な面と質的な面から総合的に、適切に分析が行われている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、第一に日本語では、授受表現や希望・要求・感情を表す表現などでタイ語に比

べて人称詞の使用頻度が低いこと、第二に、日本語では対称詞、タイ語では自称詞に不使用が多く見られること、第三に人称詞の不使用においては、日本人は「ウチ・ソト」という関係性が優先的な決定要因になるのに対し、タイ人は「親疎関係」と「上下関係」に重層的に依存していることなど、両言語の人称詞の研究において極めて重要な結果を導き出している。特に、両言語で共通とされてきた対人関係への配慮による人称詞の不使用に関し、対人関係の決定要因による人称詞の出現の相違点を示し得たことは、本領域の研究を大きく推進する契機となる。これらの結果は、丹念な先行研究の把握による新たな視点の設定と、(2)で示した複数の調査結果の総合的な考察によって導き出されたものであり、学術的に高い水準に達している。

なお、本研究の成果の多くは、すでに論文にまとめられ、学術雑誌で査読を経て、掲載に至っており、優れた研究として評価されている。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

日本語とタイ語の対照研究として、人称詞に関して重要で新たな知見を得ている本論文は、博士（教育学）の学位にふさわしい成果を上げている。特に、従来タイ語研究においては自称詞を中心に展開してきた本領域の研究に対し、対称詞に光を当てた研究として今後とも注目されることは間違いない。また、従来、別個に論じられてきた表現形式上の使用制約と社会学言語学的・語用論的要因を包括的に論じており、日本語教育現場への実践的で具体的な示唆を含んでいる。タイ語母語話者への日本語教育への寄与という点でも意義のある研究成果だと言える。

博士論文として評価されることにより、本研究の学問および教育実践への貢献はさらに高まると期待できる。